



旭川市
車いすに乗った選手が4対4で戦う車いすラグビー。パリ・パラリンピックでは、函館市出身のエース池崎大輔選手(46)の活躍もあり、日本は初めて金メダルをとりました。競技の魅力を伝えるため、こども記者まなつの2人が旭川市にある車いすラグビーチーム「神威」の練習施設を訪れました。

車いすラグビー 選手と挑戦

旭川のチーム「神威」訪問

「まなつく」は、まなぶんの「まな」と、「行く・聞く・書く」に由来する愛称です
こども記者 まなつく 見ぶん 録

熊谷迦乃さん(上川管内美瑛町・美馬牛小6年)と、井上開智さん(旭川市・西御料地小4年)が向かったのは旭川市障害者福祉センターおびつたです。神威の代表矢島勇作さん(57)が

走るの気持ちいい／パス格好いい

のゴールラインを通ると「トライ」で1点入ります。
2人は早速、プレーに挑戦しました。車いすでコートの中を移動した熊谷さんは「方向を変えるのは難しいけど、走るの気持ちいい」。選手からパスを受けてトライを決めた井上さんは「選手の手は速く、パスや動きが格好いい」と息をはずませます。

プレーする選手の障害もさまざまです。矢島さんは「骨に病気があったり、神経のまひがあったりするなど、うでやあしに障害のある人のスポーツ」と説明します。選手は障害の程度に応じて重い方から0・5・3・5点があたえられ、4人で合計8点以下になるようにします。図。

矢島さんは、障害の重い人も軽い人もいっしょにチームを組むことの面白さを伝え、「人間の可能性は無限大」と語ります。障害が重い人が車いすを引つけて相手を止めるプレーもあるそうです。

体験を終えた熊谷さんは「最後には思い切りプレーでき、満足感がありました」、井上さんは「またやってみたい」と目をかがやかせました。

選手とクラス分けの例

クラス3.5点
片手でドリブルしたり、こしをひねってプレーしたりすることができる



クラス2.0点
車いすのターン、ストップ、スタートができる。ある程度強いパスやキャッチができる



クラス0.5点
上半身の筋力が弱い。手首の力が弱く、弱いパスやキャッチができる



目で合図、声かけして連係

まなつの2人は車いすラグビーの戦い方や車いすの特徴についても矢島勇作さんに取材しました。

試合ではボールを持った選手に対戦相手が車いすをぶつけるタックルで、ゴールを防いだりします。「どうやってタックルしますか」と、熊谷迦乃さんが聞きました。矢島さんは「車いすの前の部分にタックルができます。タイ

ヤの中心より後ろにぶつかるのは危険で禁止されています。思いっきりぶつかって、相手がボールを落とすこともありますよ」と教えてくれました。

井上開智さんは「試合でチームメイトに戦術を伝える方法は何ですか」と質問。矢島さんは「神威では、目で合図する『アイコンタクト』や身ぶり手ぶりのジェスチャー、声かけで連係をとります」

といます。
競技用の車いすは、前から見るとタイヤが「ハの字」にかたむいていて、ターンしやすい作りです。ぶつかってもこわれず、とても丈夫。海外製が多く、新品だと200万円をこえるそうです。

プレーできる年齢についての質問もありました。神威には、小学4年生から始めた選手がいます。日本代表を目指す人もいますが、年齢に関係なく仲間と楽しむ人もいます。矢島さん自身は「少しでも長く続けたい」と話します。



「神威」の代表矢島勇作さん(手前)に車いすラグビーの戦い方などを聞く井上さん(左)と熊谷さん